ではないか。

もとより、これは本書および年表の価値をいささかでも減ずるものでないこと、上来述べきたつた通りである。研究叢書の今後における発展をお祈りして紹介の筆をおく。

（昭和三四年九月刊、A5三四七頁、定価六五〇円、ミネルヴァ書房発行）（朝尾直弘）

## 本庄栄治郎編 近世の大阪

最近、幕藩体制の研究が進むにつれ、この社会体制のうちに占める大阪の地位の重要な意義が再評価されつつあるが、他方、一般世間においては、いわゆる大阪ブームなるものが文学演芸を中心に主としてマス・コミの媒体を通じて広く伝播している。

しかし、現実の大阪は必ずしもそのように盛んではない。「関西経済の地盤沈下」という語によつて示された現状にたいする疑問と不安感は、大阪の経営者をして今後の歩むべき道を模索せしめるに十分なものがあつたようで、ここに単に現状にとどまらず、かつて「天下の台所」とまで称せられた近世の大阪をふり返ろうという気運の生じる遠因があつた。本書はこのような意図により、昭和三三年から翌三四年にかけて行われた関西経済同友会における一連の講演原稿をもとに編集されている。

内容は、大阪町人の家訓と気質について宮本又次、同じく学問と心学について竹中靖一、商業と蔵屋敷にかんし黒羽兵治郎、大阪と近江商人は江頭恒治、維新後における経済近代化の問題と大阪については堀江保蔵の諸氏が記述し、巻頭に編者本庄博士のこれを総括した一文がおかれている。それぞれの主題においていずれ劣らぬ練達の専門家の記したものだけにすこぶる安定感があり、近世の大阪の概要を知るに便利なものである。（関西経済同友会発行、昭和三四年八月刊、A5二二五頁）（朝尾直弘）

## 編集後記

月ロケットに象徴される自然科学の際限ない発展は、私たちのこれまで抱いていた歴史像にも大きな変革を迫つているように思います。

人類史または世界史としての像を定着させる仕事は、いつそう緊要な課題となつてきました。しかし、現状はそれぞれの国の個別史の専門家はいても、それらを統一的に把握し、全体像を描く試みをする人はきわめて少ないといわなければなりません。また、そうした見地から逆に各国史に光を当ててみることも十分おこなわれているとは申せない状況です。

史学・地理学・考古学の共通の広場としてある史林は、こうした課題にこたえるための条件にはきわめて恵まれているのですが。

御投稿をお待ちして居ります。

（朝尾直弘）

一九六〇年二月二五日印刷
一九六〇年三月一日発行
史林（第四三巻 第二号）
定価一八〇円
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内
発行所 史学研究会
振替京都五一五五番
理事長 宮崎市定
編集主任 赤松俊秀
印刷所 京都市下京区西七条御所ノ内東町三九
中村印刷株式会社